



平成26年3月31日
内閣府（防災担当）

南海トラフの巨大地震モデル検討会（第45回）及び 首都直下地震モデル検討会（第28回）合同会議 議事概要について

1. 検討会の概要

日時：平成25年11月5日（火）13:30～15:30

場所：中央合同庁舎第3号館 防災A会議室

出席者：南海トラフの巨大地震モデル検討委員：阿部座長，入倉委員，岡村（行信）委員，金田委員，橋本委員，平川委員，古村委員，山岡委員，山崎委員

首都直下地震モデル検討委員：阿部座長，岡村（行信）委員，武村委員，平田委員，古村委員，山崎委員

2. 議事概要

首都直下地震及び相模トラフの巨大地震について強震動や津波の評価について、長周期地震動の評価等について事務局から説明し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

【首都直下地震の検討】

- 首都直下の地盤データについて、ボーリングの結果を用いるのがよいのではないかと。
- ボーリングデータが多いところはよいが、やわらかいところはボーリングデータが少ないということがある。
- 相模トラフ沿いの最大クラスの地震は房総半島先端の地殻変動から2000年から3000年もしくはそれ以上の期間の間隔で発生するとして整理してはどうか。

【長周期地震動の検討】

- 南海トラフの既往地震は応力降下量を30MPaで再現し、1 σ 大きくした最大クラス相当のモデルを構築して長周期地震動を計算している。
- 長周期地震動の検討でランダムさを与えることで、見かけ上短周期が過大評価みえるのと、サグが生じたかもしれない。大体どれくらいの周波数のところがサグになるかについて、2つ気にしなければいけないことがあって、メッシュサイズと、それに対する平均速度が関係している
- これまで、事務局では丁寧に過去地震の震度の再現モデルを作ってきたが、長周期地震動についても関東地震の観測記録と比較してはどうか。
- 応答として物理的に意味があるのは、加速度は絶対応答、速度変位は相対応答ではない

か。

- 建物については相対速度応答、人間への影響から、絶対速度応答を示すのはどうか。
- 建物とかが壊れるか壊れないかは絶対加速度で基本的に決まっており、絶対加速度応答を見るべきではないか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 中込 淳

同参事官補佐 平 祐太郎

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199